

ズービン・メータ指揮

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

前半の曲目は、ルドルフ・ブッフビ
ンダーを独奏に迎えた、ブラームスの
ピアノ協奏曲第1番。このコンピは最
近、同曲のアルバムを発売したとのこ
とだが、ブッフビンダーは、この日は
殊に可もなく不可もなくソツなくま
とめあげる、といった調子で、どこか
気の無い様子。メータもいまひとつ調
子が出ない。やっと第3楽章に至つ
て、一瞬ウィーン・フィルらしい気合
いの入った音が聴かれた気がしたが
…。ピアノリストのアンコールにグリ
ンフェルト「ウィーンの夜会」。これ
いかにもウィーン土産らしく観客を
喜ばせる曲。さて後半のドビュッシー
「海」とラヴェル「ラ・ヴァルス」は一
転して素晴らしい出来で、速めのテン
ポに柔軟な反応で、まさに現代オケの
模範としてのウィーン・フィルとメ
ータならではの、素晴らしい完成度と
熱気を十分に堪能できた。アンコー
ルに「白鳥の湖」よりワルツと、「トリ
チ・トラッチ・ポルカ」。これらも味
わい深い演奏。(10月7日、サントリー
ホール)

(倉林 靖)

札幌交響楽団
第59回定期演奏会

今回の第5番で札幌名誉指揮者ラ
ドミル・エリシユカによるチャイコ
フスキー3大交響曲シリーズが完結
した。これまでにエリシユカは雄渾な
チャイコフスキーを聴かせたが、今回
も精気溢れるドライブで期待を裏切
らない。第1楽章から起伏に富んだ第
1主題を、ゆらぎのあるフレーズ感で
丹念に紡ぎ上げていく。緩徐楽章のホ
ルンの甘美な旋律もロマン性を際だ
たせながら、木管楽器、弦楽器へと受
け渡していく。終楽章でも「運命の動
機」が劇的に展開。鮮血が迸るような
鋭い金管楽器の総奏は、やや過剰かと
も感じたが、オケの躍動感は絶好調。
作曲家自身は、この曲を「大げさに飾
った色彩があり、人々が本能的に感じ
るこしらえ物的な不誠実さがある」と
自虐的にとらえていたが、エリシユカ
はむしろそうした楽想を逆手にとり、
総天然色のな色合いで豪快に描きき
った。前半のスメタナ、ドヴォルジャ
ーク作品がチェコの爽やかな風を耳
元に届けてくれた。(10月15日、札幌コ
ンサートホール)

(八木幸三)

東京フィルハーモニー交響楽団
マスカーニ《イリス》

音楽の底力を堪能した一夜。幻想の
日本を自由に描いたマスカーニの歌
劇《イリス》を、気鋭の指揮者アンド
レア・バッティストーニが十二分に
読み解き、演奏会形式ながら作品の内
奥を鮮明に呈示していた。特に第2幕
後半が秀逸。バッティストーニの緩急
自在の棒が全体を強く引き締め、新国
立劇場合唱団の団結力と気魄、題名役
のラケレ・スターニシ(S)の仄暗
く硬質の響き、相手役オオサカのフラ
ンチェスコ・アニーレ(T)の明晰な
フレージングが良く噛み合った。
邦人勢も熱演。チェーコ役の妻屋
秀和(B)の太い声音、ディーア&芸
者役の鷲尾麻衣(S)の陰影に富む歌
いぶり、女術キョウト役の町英和
(Br)の飄々とした個性、行商人&く
ず拾い役の伊達英二(T)の通りの良
い響きなど印象に強い。東京フィル
ハーモニー交響楽団も快演。ヴァイ
オリンとコントラバスの雄弁なソロ
に痺れ、金管&打楽器の勢いにも感
じ入った。(10月20日、サントリーホ
ール)

(岸 純信)

平井元喜 ピアノ・リサイタル

音楽一族で英国在住の平井元喜の
演奏会。平井による2作、「小倉百人一
首」による「音詩」は、ゲストの冷泉貴
実子(藤原定家直系)によると、冷泉
が選んだ「天つ風…」ほか、四季や恋
の歌などの10首に拠る作品とのこと、
曲は組曲形式で、和音の響き、フレー
ズの綾織り、装飾音やペダル用法など
も効き、日本的な情緒を漂わせた。2
011年作「Grace and Hope…」は熊
本地震を受けて選曲、真摯に、温かみ
もある音調で奏でられた。
ベートーヴェンのソナタOp 90は自
然な表情で清々しく、第2楽章では
紡ぐよう、喜びや舞い踊る気分をも想
わせた。シューベルトのソナタD 96
0では旋律の味や作曲家晩年の情緒
も感じさせ、第3楽章での強弱の対照
性や終楽章での趣向を明快に表した。
ショパンの3曲、「マズルカ」Op 63の3
ではテンポを揺らし、民族舞曲の躍動
感や趣きも十分、「ノクターン」Op 15
の1は明澄な音で伸びやかに、中間部
での激しさも印象的、「スケルツォ第
2番」では進むような情緒の豊かさ、
流麗な弾奏も聞きものとなった。(7
月1日、王子ホール)

(菅野泰彦)